

**令和 7 年度ウルメイワシ対馬暖流系群資源評価会議
議事概要**

日時：令和 7 年 8 月 5 日 午後 3 時 40 分～午後 5 時 20 分

場所：水産研究・教育機構長崎庁舎 浮魚資源部副部長室（Teams によるオンライン会議併用）

参加機関数：18 参加者数：51（有識者含む）

【議論の要約】

- ・ 昨年からの変更点。大中まき CPUE を 90%説明レベルでフィルタリング後に GAM により標準化。ノミナルほど低下せず。
- ・ 2024 年の漁獲は 2023 年に引き続き好調。2024 年の加入は過去 2 番目に高い水準と評価。漁獲圧は高いものの、親魚量は増加と判断。ただし、若齢魚への漁獲圧が高まっている点に注意。
- ・ 現時点での 2025 年の漁獲量はやや少なく、漁獲圧は低いと考えられるため、将来予測では 2025 年の漁獲量を過去 3 年平均水準（4.9 万トン）と仮定。2026 年 ABC は 5.8 万トン。
- ・ 体長組成サンプリング、年齢査定、CPUE 解析などに課題あり。

1. 資源評価案の検討

（発言は概要。一部順序を入れ替えている場合もある。簡単な確認のための質問は省略。）

【全体を通して】

参画機関：事前に掲示された案に対して質問を出したが、質問に対する回答で評価に対する理解が深まった。

有識者：あまり大きな問題点は見当たらなかった。比較的安心して見ていられる評価。

座長：漁業者は、混獲されやすいウルメイワシの TAC の影響で他の漁業が止まることを危惧している。今後もステップ 3 に向けて、資源評価の様々な改善が必要だと感じている。

担当者：MSY 計算時から選択率や平均体重が変わっており、このままの値を将来予測に使ってもいいのかが気になっている。2024 年の漁獲量は ABC と同程度だったにも関わらず、平均体重が減少した影響で F が高かった。今は加入がいいので将来的に楽観的な資源評価結果になってはいるが、今後漁業や生態の変化などの影響で管理がうまく行かない可能性がないか気になっている。

【各県の漁況について】

参画機関（長崎）：長崎県では、今年 6 月の実績を見ると、サバの漁獲が 1000 トンくらいに落ちた代わりにウルメイワシは 4000 トンくらいの水揚げがあった。今からウルメイワシが獲れてくるのかなと思っている。過去 2 年と比べるとウルメイワシの漁獲実績が低かったので、今評価されている結果と将来予測の F の調整はそれでいいのではないと思う。

参画機関（島根）：境港の水揚げ量における 2025 年の低調な状況を受けて現場でヒアリングをした。感覚としてはマイワシの漁期が終わってからウルメイワシが来るとのことで、島根県では今年はマイワシの漁期が例年より長いと、今後ウルメイワシが遅れて獲れてくるのではないかと。ただし、月別漁獲量では 5～6 月と 8～11 月に漁期の山があり、後半はマイワシの漁期と一致している。そのため、マイワシと漁期が被らないのは最初の群れだけと思われる。

座長：ウルメイワシは混獲が多い一方で、他の魚種が獲れなければセカンドオプション、サードオプションとして漁獲の選択肢に入る場合もある。そのような情報が少ない中で、何とか今あるデータを駆使して評価を行っている。

【体長組成サンプリングについて】

参画機関（長崎）：混獲種として揚がってきており、他のイワシ類と混ざって測定している。サンプルの頻度や上限を調整しないと小型個体が多くなるなどのバイアスがかかり、資源評価に影響しないか気になる。ウルメイワシに限らずいわし類は同様の課題がある。

担当者：2024 年は最初から 100 個体しか測らないように測定数を制限してもらった。長崎県だけでなく、鹿児島県についても 0 歳魚が多かったので、実際に小さい 0 歳魚が多かったと判断した。

参画機関（鹿児島）：サンプリングそのものについて困ったことはない。ただ、ウルメイワシの漁獲が昨年の半分以下で、（水揚げがないので）行きたい時にサンプリングできないことがあった。今年はあまり獲れてないが、棒受網が 7 月から始まる。これからどれくらい伸びるかモニタリングしていく。

参画機関（鳥取）：今年の 7 月の速報値を見ると、前年よりは獲れており、平年並みとなっている。近年の漁況だといいい年と悪い年の差が大きい。専獲より混獲で獲られるが、7 月はウルメイワシが主体で揚がるときもある。サンプリングは基本的に混獲個体。近年大きい 20cm 前後の魚が 6 月や 7 月に多いのが気になっている。

担当者：先日長崎県の漁業者と情報交換した際、熊本県牛深でウルメイワシを対象とした漁業があると聞いた。ウルメイワシを狙っている漁業の CPUE や漁獲量の推移が利用可能か知りたい。

参画機関（熊本）：熊本県でウルメイワシの漁獲があるのは敷網（棒受網漁業）。6月はお出しが悪かったが、漁業者いわく獲れやすい水深における獲れやすい水温があり、漁場の水温が上がれば今後獲れるだろうということ。雑節の工場でウルメイワシの需要があり、11,12 経営体が専業でウルメイワシを漁獲している。ウルメイワシの節はカツオ節みたいな感じ。京都に送ってそちらで削って出汁にして使用する。大きいのは20cm くらいで、脂がのらないので節にしやすい。今はウルメイワシよりもカタクチイワシ、マイワシの方が獲れている。ウルメイワシは混じりという感じ。マイワシは先月で言うと平子などの当歳魚サイズ。カタクチイワシもそんなに大きくない。

座長：牛深の細かいデータを利用できる機会はあるだろうか。

参画機関（熊本）：船によっては、標本船調査などをお願いできるかもしれない。

【2025 年卵稚仔調査の結果について】

水研：卵稚仔調査についてフィードバックしたい。2025 年の結果も集計済みで、ウルメイワシについては、去年と同じぐらい産卵量だった。懸念は日本海での産卵量で、ここ2,3 年上向きだったが2024, 2025 年と産卵量が低めに出ている。対馬海峡をはさんで九州の西側は若干上向き。

座長：東シナ海と日本海で産卵量に負の相関があるようにも見える。分布の中心が変わったりするのかもしれない。全体的に見れば、産卵量と資源量の変動がよく合う魚種なので、資源評価において産卵量の情報を引き続きうまく使っていきたい。

【年齢査定、成長成熟について】

水研：まだ共有できる結果は出ていないが、横浜庁舎の同僚たちとも情報交換しながら、年齢査定を進めている。18cm くらいまでの日齢査定は、2000 年代の大下さんの結果と同様だった。18cm を0 歳として、20cm 以上の個体は耳石の年輪を見ているが、これまで対馬暖流系群で推定されていたよりも成長が早いかもしれない。しかし、年齢査定の年輪がクリアではなく、判断が難しい場合がある。成熟の方も組織を見ているが、1～8 月と11～12 月に産卵個体が出てくる。そこまで産卵時期が長いと、孵化時期によって成長差が異なるのではないかと懸念もある。サンプルとしては長崎水試のご協力もあり、25cm ほどの大型個体も含めて揃っているので、今後も年齢査定を進めていきたい。

座長：生活史的にはマイワシよりもカタクチイワシに似ている部分があるのかもしれない。産卵期が長いと資源評価として難しいところも出てくるので、今後も分析を進めたい。

【指標値の算出方法についての検討】

座長：今後の検討課題は何か。

担当者：今回の資源評価では標準化 CPUE に変更したが、残差の偏りが解消できなかった。

フィルタリングしているが、その方法が良くない可能性もある。一方で、全操業データはバイアスが大きいと考えられる。どのようにフィルタリングして指標値を出すの
がいいのかは今後も検討していきたい。

座長：混獲や専獲のデータが混ざってる中、どのデータを用いるのがいいのか。ノミナル CPUE を標準化するだけで資源評価の結果がそれなりに変わるため、慎重に検討したい。

担当者：指標値を増やすことも要検討課題。長崎県の漁獲量が多いので、長崎県の CPUE についても引き続き検討したい。

参画機関：大中まきはここ 2,3 年、専獲ではなく混獲による漁獲の積み上げで獲れている。今のやり方がよいのかどうか検討を。専獲の割合が減っていると実像が掴みにくくなる。

座長：ここ数年はマイワシとの混獲が主のようだが、長崎水試が確認した通り、サバとの関係もありそうだ。ウルメイワシがどういう漁業対象種かをしっかり見ていく必要がある。

担当者：熊本県の狙い操業も今後参考にしたい。

座長：阿久根あたりで丸干しがある鹿児島県についても漁獲量は結構なものだと思うので、熊本、鹿児島あたりで分析を進めていく。

参画機関：島根県のデータを見ると、マイワシとの関係が気になる。昔はマイワシとの関係が見えたのに、混獲レベルでしか取れないからよく分からなくなった。長崎県のサバの様に関係が見られたらいいなと思う。

担当者：混獲種はフィルタリングもそうだが、他魚種の情報もうまく使うのいいのだろうか。狙いを入れるのは難しい。

座長：決まったやり方はないので自分たちでやるしかない。ウルメイワシも 10 年ほどの周期で変わってくるように見えるので、その辺りも注意が必要。

座長：ここ数年、小型魚の漁獲が多くなっているの、TAC の Step を進める際にはもう一度管理基準値等を計算しないといけないかもしれない。スケジュールについてまだ定まっていないので、情報を集めて進めていきたい。

資源評価案について提案通りに承認された。なお、欠席した山形県、秋田県、福井県、京都府からは会議に承認を一任すると事前連絡があった。

2. 有識者による講評

直近の漁獲具合や他魚種の漁獲具合の関係も含めて、色々な角度から目配せをしながら議論が進められている。どういうふうにすれば資源評価に反映して改善できるのか、今後非常に楽しみになった。難しい点はあるが、こういった議論を通じて方向性が見えてくるのではと思う。